

中国都市部における伝統的育児道具・技法とその変容：股割れズボンとやり手水を中心に

翁，文静

九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程

<https://doi.org/10.15017/7384467>

出版情報：国際教育文化研究. 13, pp.99-110, 2013-07-26. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



中国都市部における伝統的育児道具・技法とその変容

—股割れズボンとやり手水を中心に—

翁 文静

はじめに

本稿の目的は、中国の伝統的な股割れズボン¹及びそれに深く関連する技法であるやり手水（大人が子どもを「ささげて」おしっこ、うんちをさせてあげること、中国語では把（ba）尿と書く）に焦点を当て、中国都市部における伝統的な育児習俗の持続と変容を描き出すことにある。股割れズボンに関連する技法は主に、大人によるやり手水及び乳幼児自身の排泄技法であると言われる（方曙 2012 黄小蓮 2012）。本論では主に前者のやり手水を中心に取り上げる。

本稿執筆のきっかけは先端的な科学知識や技術が溢れる上海市の産育の現場（病院、育児施設など）において、伝統的な育児習俗が観察できたことであった。例えば、設備を整えた産後療養施設（月子センター）で医者や看護婦に囲まれながら丸ごと一ヶ月をかけて、伝統的な「月子²期間」を過ごす「座（zuo）月子」や、早期教育センターのような子育て支援施設で、子どもの食欲の有無や好みなどを一切考慮せず、無理やりに子どもに食べさせ続ける「塞（sai）」などである。その中、筆者の関心を最も引いたものが子どもたちの穿いた股割れズボンであった。ままごとキッチンセット、ボール・プールなど大小様々な知育道具に囲まれながら、まるで場違いようなお尻を丸出しの子どもたちの姿が筆者の目に奇妙に映った。さらに、筆者が股割れズボンを着用する親子に対してインタビューを行う中で、彼らの回答から股割れズボンのみならず、普通のズボン、オムツ、やり手水などのキーワードが次々と飛び出した。筆者がインフォーマントたちにとっての股割れズボンは、それ自体単独で用いられるのではなく、それに深く関わる技法（やり手水）やその他の道具と密接に関連しながら、一つの排泄行為・習俗を構成していると考えた。

ここで、本稿に深く関わる身体技法の概念及びこの概念を援用するいくつかの研究を紹介する。端的に言えば、身体技法とは、「身体」を技法として捉える概念で、「人間がそれぞれの社会で伝統的な態様でその身体を用いる仕方」（モース 1976:121）と、モースによって最初に定式化されたものである。そして、それは、ある特定の社会的過程の中で、様々な身体的所作が模倣行為などを通して無意志的に習得されるありようを主題化している。文化人類学者の川田順造は、モースのこうした考察が、「身振りによる表現・伝達や、文化の中の身体の象徴性の面に向けられ、身体技法が関わっている重要な領域である道具、住居をはじめとする物質文化や

技術との関連を問題にした研究が、皆無に近いこと」を「いぶかしく思う」と言って問題視している。川田はこのような観点から、日本とフランス、そして西アフリカ内陸社会の民族を対象に、いくつかの身体技法と物質文化・技術の関連について検討を行っている（川田 1992）。また、長谷川まゆ帆は「お産椅子」という家具/道具を取り上げ、それらが生み出し構成していた身体の所作とそのメタレベルの意味について論じた。長谷川はお産椅子の変化はお産の身体を「近代へと押しやる」新しい変化に接合されていくと指摘した。つまり、18-19世紀の間に「お産椅子」からヒントを得た産科学者たちは、「お産椅子」を改良することによって、「お産椅子」から分娩台への移行を構想したのである。

さらに、本稿の問題意識に密接にかかわる研究の一つとしては、例えば、坂元らの「ビュシュック（揺籃）育児とその再編—中国新疆ウイグルの産育文化の一側面—」（坂元・アナトラ 2008）があげられる。坂元が伝統的なビュシュックに注目し、新疆ウイグル社会で維持される伝統的な産育実践の現状を確認するとともに、急激な変化のなかにある少数民族文化の変容やエスニシティの動態に関する手がかりを探った。また、坂元はモースの技法概念を産育儀礼の領域にも拡張して適応している。「こうした広い視野のなかにビュシュックを置くことで、ビュシュックに備わった道具の側面と意味的側面を同時に論ずることが可能となり、結果的に単なる産育の民族慣行の記述をこえたエスニシティ論や文化動態論などより広範な議論へ接続する可能性もひらける」（p 59）と指摘した。

本稿も基本的にこれらの研究の観点に即して、伝統的な育児習俗の持続と変容に着目するものであり、その習俗に含まれる道具間及び道具と身体技法の関連性を浮かび上がらせようとする試みである。なお、筆者は上海市の二つの地域の早期教育センターを中心に、2010年12月19日から2011年1月8日、及び翌年2013年3月13日～3月27日に調査を行った。調査方法は股割れズボンとやり手水を中心とする観察やインタビューである。また、本稿では、センターの活動に参加する親子、祖父母などの親族のほか、育児の重要な担い手としての家政婦たちも分析対象とする。

以下Ⅰでは、まず、古代、近代、現代にける股割れズボンの形態の変遷について概観し、その上、観察やインタビューの結果から、股割れズボンの使われ方、つまり、股割れズボンとその他の排泄道具である紙オムツ、普通のズボンなどとの併用・使い分けを見てみる。Ⅱでは、やり手水を定義した上で、その実施事態を把握し、さらにやり手水と股割れズボン及びその他の道具（普通のズボンと紙オムツ）との関連についても考察を行う。

Ⅰ、股割れズボンの変容と実態

1、股割れズボンの歴史的変化について

①古代の大人股割れズボン

李澤静によれば、古代の股割れズボンが腰回り、股回り及び筒という三部分に分けることができる。しかし、戦国時代における股割れズボンが膝下までの筒しかなかった。その後の秦漢の時代になると、股割れズボンの長さが次第に太ももまで増加したが、股回りと腰回りはまだなかった。しかし、西漢になると、股回りまで長さが伸ばした股割れズボンが現れた。その理

由の一つは、『漢書口外威伝』の中に次のように述べられている。「西漢の名将霍去病の弟である霍光が若い皇帝に自分の孫を皇后として嫁がせた。皇后が皇帝を独り占めにし、いち早く子どもを産ませるように、霍光は皇帝に対して体を大事にするため、皇后以外の女性と性行為をしないようにと助言をした。そのうえ、念のため、女官らに股があるが腰回りのないズボンを穿かせ、幾重にも帯を締めさせたということである」。しかし、その後の時代は戦乱が続き、漢民族の人びとが戦いを通して、遊牧民族の股の縫合された普通のズボンを穿くようになってきた。さらに、その後の椅子の登場による生活様式の変化や、国内・国外の影響など様々な原因で、股割れズボンは次第に大人の世界から姿を消し、清代（1636年～1912年）になると、子どもの専用ズボンとなっていた（李澤静 2010）。

このように、股割れズボンの長さが時代の変化とともに、最初の膝下までの筒から、徐々に太もも、そして、股まで伸びてきた。しかし、他民族などの影響を受け、大人の股割れズボンは次第に子どもの股割れズボンへと変貌していく。

②近代の児童股割れズボン

以下では「上海紡織服飾博物館」の所蔵する 17 本の児童股割れズボンを中心に、近代中国における子どもの股割れズボンの構造、種類などについて分析する。同博物館の李晓君によれば、近代股割れズボンは腰回り、表素材、裏素材、装飾という四つのパーツから成り立っている。腰回りの部分と裏生地が綿を多く使われており、その理由は綿の安さ、丈夫さに加え優れた吸湿性があげられている。一方、表素材にシルクがよく使われている。17 本のズボンのうち、表素材にシルクを使用したズボンは 16 本もある。股割れズボンの装飾を見てみると、すそのところにレース、清代の典型的な飾りなどが付けられている。

また、李は 17 本の股割れズボンを①圀系式 (huixishi)、②半圀系式(banweixishi)及び③套穿式(taochuanshi)という 3 種類に分けて、それぞれを以下のように定義した。①の圀系式とは腰巻に縫い合わせないズボンの筒を付ける形であり、正式な場合で穿くズボンと推測される(図 1-1)。この場合正式な長めの児童上着と一緒に着用する場合が多い。②半圀系式股割れズボンとは股の空いた部分を腰回りまで伸ばすズボンのことであり、筒のところは縫い合わせられている(図 1-2)。③の套穿式股割れズボンは現代の普通ズボンに近いが、股のところだけ縫い合わせないのが特徴である(図 1-3)。一方で、李は中国近代の児童股割れズボンが西欧の影響を受けていることも指摘している(李晓君 2012)。

図 1-1 圀系式

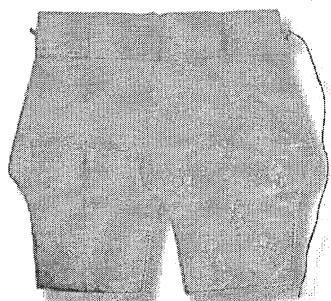
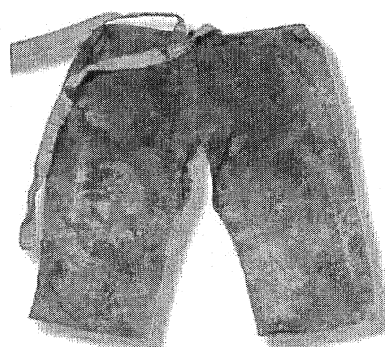


図 1-2 半圀系式



図 1-3 套穿式



③現代における股割れズボン

本章では、上海市の最も有名な妊産婦及び子育てグッズを販売する会社の一つである「母嬰の家」を取り上げ、近代の股割れズボンと比較しながら、現代における股割れズボンの特徴について考えてみたい。

「母嬰の家」で取り扱っている股割れズボンについて調べてみると、いくつかの点において、上記の近代の股割れズボンとの共通点、相違点が見られる。まず、近代の股割れズボンと「母嬰の家」の股割れズボンの共通点についてみてみよう。近代の股割れズボンの②の半囲系式と③の套穿式（図 1-2、1-3 参考）と似たような形の股割れズボンが「母嬰の家」でも販売されていることが分かる。例えば、ディズニー社の CUTIES シリーズ（図 1-4）、Minimoto の minimoto12Q（図 1-5）などである。近代と現代の股割れズボンのもう一つの共通点は素材であり、両方とも綿を使用している。

両者の相違点については次のようにまとめることができよう。まず、現代の股割れズボンを見ると、下着としての股割れズボンが多く、外でも穿ける股割れズボンが殆ど見当たらないことである。そのため、ズボンのすそところにレースなどの装飾がなく、代わりに実用性のあるずれ防止のゴムなどがついている。一方、近代の股割れズボンが殆ど下着なしでそのまま穿けるものである。そのため、裏生地が綿で、外の生地はシルクが多く、その上、色が鮮やかで、装飾のあるズボンが多い。このように、近代、現代の股割れズボンを比較してみると、中国都市部における一体型の股割れズボンが時代の変化とともに、表から見えない下着へと変貌しつつあると言えよう。そして、近代と現代の股割れズボンの二つ目の相違点とは、現代の股割れズボンが調節できる点である。例えば、普通ズボンから股割れズボンへの変更できるズボンがある。つまり、普通のズボンでありながら、鉋で股のところを切れば、必要に応じて、股割れズボンに変更することができるのである（図 1-6）。

以上のように、近代と現代の股割れズボンの共通点は形が似ていること、と両方とも綿を使用していることである。つまり、近代のモノが現代になっても、完全に消え去ったのではなく、形を少し変えつついまだに残っているということである。そして、現代における股割れズボンの特徴は主に下着として使われ、鉋で切れば、股割れズボンに変更できることなどである。

図 1-4 ディズニーの CUTIES 図 1-5 minimoto12Q 図 1-6 股あり・割れズボン



2、股割れズボンの使用実態

前節では、股割れズボンが時代と共に、その形を変更しながら、現在まで維持されていることが確認できた。次に、股割れズボンとその他のモノ・道具との関連に念頭を置き、股割れズボンの使用実態を把握したい。ここで使用されるデータは主に、X区、B区の両区の主催する「親子活動」³に参加する保護者など11名、区の責任者及び教師ら5名に対する聞き取り調査にもとづくデータである。インタビュー・項目には、インフォーマントの年齢、性別、股割れズボンの使用のほか、股割れズボンに関連するオムツの使用法、排泄技法の有無、排泄場所・道具などの項目も設定した。また、インタビュー・項目に記載された特定のトピックを扱うが、インタビューに対して回答の仕方を選択する自由、また、自分にとって意味のある他の話題に触れる余地を残しており、開放性や文脈情報の獲得に有益であることを考えて、半構造化インタビューの手法を採用した。11名のインフォーマントの属性や股割れズボンなどの使用状況は表1-1に示した。

表 1-1 股割れズボン等の使用状況

	月齢 性別	インフォーマ ント属性	股割れズボン の使用	オムツの使用	排泄技法	排泄場所・道 具
A	15 男	30 代の父親	下着と外両方 股割れ	紙、布オムツ 両方使用	やり手水	大人のトイレ
B	20 男	30 代の母親と 母方祖母	普通ズボン	紙オムツ	なし	紙オムツ
C	20 女	60 代父方祖父 母	自宅は股割、 外出は普通	しない	やり手水	子どもおまる
D	14 女	30 代母親と母 方祖母	普通ズボン	紙オムツ	やり手水、夜 は紙オムツ	洗面器
E	18 女	30 代母親と祖 母	普通ズボン	紙オムツ	やり手水はあ まりしない	紙オムツの中
F	13 女	30 代両親	普通ズボン	冬は紙オム ツ、夏は布	時々やり手水	子どもトイレ と紙オムツ
G	13 男	60 代母方祖母	下着は股割 れ、外は普通 ズボン	夏布、冬紙オ ムツ	なし	紙オムツの中
H	22 男	50 代家政婦	普通ズボン	夜紙オムツ	やり手水	洗面器
I	22 女	40 代家政婦	普通ズボン	夜と昼寝は 紙オムツ	やり手水	子どもおまる
J	23 男	60 後半母方祖 母	普通ズボン	一日7枚の紙 オムツ	家政婦はしな い、自分はや り手水	家政婦は紙オ ムツ、自分は 子どもトイレ
K	26 女	40 代家政婦	普通ズボン	夜紙オムツ	やり手水	子どもおまる

以下では、まず、股割れズボンの使用実態及びその理由についてまとめ、次に、幾つかの事例を通して、股割れズボンと普通ズボン及びオムツとの関連を考察する。

股割れズボンの使用・不使用及びその理由について、11 のケースのインフォーマントたちにインタビューを行った。インタビューの結果わかったことは 11 ケース中、股割れズボンを着用するケースはわずか 3 件であり、残りの 8 ケースは全く穿いていないということである。股割れズボンの着用の理由について主に「伝統的なやり方」、「オムツはずしの早さ」、「子どものお尻が寒さに強い（寒さに慣れさせ、元気な子を育つため）」、「湿疹・お尻かぶれになりにくい」、「排泄・オムツ交換のしやすさ」などであった。一方、股割れズボンを全く使わない理由は主に 4 点あげられる。つまり、1、若い世代の反対、もしくは育児書・育児雑誌の影響、2、女の子だから、恥ずかしい。3、不衛生であり、菌に感染しやすい、4、寒いなどである。

次に、股割れズボンの着用事例を取り上げ、股割れズボンと普通ズボン・オムツとの関連について検討する。例えば、股割れズボンのみを着用するケース A を見てみよう。ケース A の父親が育児の主な担い手である母方父母の言う通り、15 ヶ月の息子に股割れズボンを穿かせている。父親らが自宅にいる時に子どもに股割れズボンと布のオムツを着用させるが、外出する際に、例えば早期教育センターに通う時に、紙オムツを息子に着用させている。その理由を尋ねると、「子どもの肌の状態を考えると、自宅では股割れズボンのみを穿かせる。寒い季節になれば、布オムツも併用します。しかし、外に行くと、施設を汚したり、先生たちに迷惑をかけたりの恐れがあるので、息子に紙オムツを着用させている。」と回答した。

また、20 ヶ月になる女の子の父方祖母が次のように述べている（ケース C）。「孫は女の子であるため、自宅では股割れズボンを穿かせ、外出する際に、普通のズボンを穿かせる」。さらに、ケース G の母方祖母が 13 ヶ月の男の孫に紙オムツを使わせ、下着としての股割れズボンと手編みの毛糸股割れズボンを穿かせた上、一番外に普通ズボンを穿かせる。この祖母によると、孫が生まれて間もない時に、病気を患い、孫の健康管理（寒さを感じさせない）のため、股割れズボンに保温性の高い紙オムツと普通のズボンを併用しているという。

股割れズボンの使用実態について、次のようにまとめておくことができよう。まず、股割れズボンの着用の少なさである。その理由は先述のように、衛生、ジェンダー、都市化、欧米の影響などがあげられる。一方、少数派ではあるが、股割れズボンを使用するケースもある。これらの使用ケースを詳しく見ると、それぞれの使用法が異なる。ケース A の場合には、子どもに股割れズボンのみ穿かせているが、ケース C の祖母が孫の性別を考慮した結果、自宅で股割れズボンを穿かせている。一方、ケース G の祖母が孫の健康を第一に考えて、下着としての股割れズボンを孫に穿かせている。また、この三つの事例を通して、股割れズボンと他のモノや道具との併用・使い分けも確認できた。例えば、ケース C においては、自宅と家の外という場所の基準で、股割れズボンと普通ズボンの使い分けを行っている。ケース A の場合にも、同じ基準で、布オムツと紙オムツを使い分けている。またケース G の場合には、下着と外着という基準で、股割れズボンと普通ズボンを併用している。

Ⅱ、やり手水の実施実態

ここでは、まず、先行文献と調査データを合わせ、やり手水の定義を定める。その上、やり手水の実施事態を把握し、その技法とモノ・道具（股割れズボン、普通のズボン及びオムツ）との関連について考察を行う。

1、やり手水の定義及び実施実態

やり手水は中国の伝統的な排泄方法ではあるが、ごく日常的な出来事であるためか、学術的に殆ど注目されていない。しかし、やり手水に関する記事は育児書や育児、健康雑誌にたびたび掲載されている。例えば、中国福利国際平和婦幼保健院の馬梅英が『準爸爸新爸爸』の中で、「やり手水とは乳幼児に対する大小便の訓練であり、乳幼児の排泄条件反射を鍛えるため、大人がやり手水をする際に、擬似的な声を出すべきである。また、乳幼児が排泄する前に、何らかのサインを出す場合が多い、大人が察することができれば、やり手水を成功させる可能性が大きくなる。さらに、乳幼児の排泄間隔、習慣を把握したうえで、大人がやり手水をさせ始めた方がよい」と述べている。また、「「非要強制把尿么?」」という記事には以下のようにやり手水を定義している。中国の伝統的なやり手水とは、大人の両手が乳幼児両足を分け、乳幼児の体を自分の身に委ね、口に xi xi などの声を出し、乳幼児に排泄させることである（『母嬰世界』2007.10）。さらに、記事「把尿这件事儿」にやり手水とは一定の動作もしくは音声訓練を通して、乳幼児に排尿条件反射を鍛え、その結果として、乳幼児が順調に排尿することであると定義している（『愛情婚姻家庭』2012.10）。

以上の文献を踏まえた上で、ここでは改めてやり手水を再定義してみたい。やり手水とはある決まった動作（両足を広げる）もしくは音声（排尿なら xixi、排便なら en en）を通して、乳幼児に反射的に排尿・排便させる行為であり、その行為に乳幼児のサインを察すること及び乳幼児の排泄の習慣・間隔を把握することを伴う。つまり、やり手水が単なる排泄させる行為と見なすことではなく、その前の段階における乳幼児のサインを察すること及び乳幼児の排泄の習慣・間隔を把握するという行為をも含むべきであると筆者は考えている。インフォーマントたちもこの点について言及をしている。例えば、22 ヶ月の女の子を育てている家政婦の I さんが「私はたくさんの乳幼児を育ててきている。大体の赤ちゃんがミルクを飲んだ 30 分後におしっこする。そのため、そのタイミングを計ってやり手水をさせている」と語っている。また、40 代の家政婦の K さんが自分の育てている 26 ヶ月の女の子に 2 時間間隔（水を飲んだ場合には、1 時間間隔）で排尿させている。それ以外に、k さんが常に言葉で女の子に排泄するかどうかを確認しているという。さらに、60 代の父方祖母 c さんの場合、常に孫の様子をチェックし、孫がサイン（じっと動かない）をキャッチし、やり手水をさせているという。早目の時期からやり手水をさせたため、孫がほかの子と比べるとオムツ離れが早いという。以上の事例が意味することは、やり手水が乳幼児に排泄させるという瞬間的な行為にとどまらず、頻繁的な観察や、長期的な排泄習慣・間隔を把握することも含まれるということである。

次に、調査データに基づき、やり手水を実施の有無や場所について簡単にまとめてみよう。両区の早期教育センターに通う 11 名のインフォーマントにやり手水の実施を訪ねた結果、11 ケースの中、やり手水を行っているもしくは行ったことがあるケースが 9 件であり、その殆ど

が主に自宅で行われていることが分かった。その主な理由としては「自宅と設備の整った施設以外では簡単にできない」、「施設・他人に迷惑をかけるから、紙オムツの中にさせている」、「女の子だから、お尻が見せられない」、などがあげられる。一昔前は、農村部はもちろん、中国都市部でも、やり手水を行うのが一般的であった。しかし、最近では、人前でやり手水を行う光景が見られなくなりつつある。この変化過程には、インフォーマントたちの述べた通りに、生活様式の変化、公衆/洋式トイレの普及、ジェンダー、紙オムツの登場など、子育てをめぐる環境の変化が大きく関わっていたと思われる。

また、やり手水を行う・行わない理由について、以下のようにまとめられる。やり手水の実施理由は主に「オムツ離れが早い」、「自分（祖母）の子育て経験だから」、「お尻かぶれになりにくい・子どもの肌思い」、「お金の節約」などである。例えば、I ケースの家政婦が「小さい乳幼児にもやり手水をさせている。そうすれば、子どもがお尻かぶれになりにくいし、気持ち良いに決まっている。また、やり手水のお蔭で、雇い主がどれほどお金を節約しているだろう」と自慢そうに述べている。一方、やり手水を行わないもしくはやめた理由は主に3点があげられる。1、若い世代の反対、2、子どもが嫌がる 3、子どもが自分で知らせるまで待つべきだ（紙オムツの中でさせるべきだ）などである。例えば、E ケースの両親（30代）がやり手水を13ヶ月の娘にさせているが、時々娘が嫌がり、そのため、両親が紙オムツの中で排泄させているという。このように、インフォーマントたちがやり手水について語る際、自然とさまざまなモノ・道具について言及している。以下では、筆者が道具としての普通ズボン及びオムツとやり手水との関連について焦点を当てる。

2、やり手水とモノ・道具の関連性—技法の拡大と新しい技法の出現

まず、やり手水と股割れズボンの関連に触れておこう。黄は教育学・心理学の立場から、「**婴幼儿如厕训练的合理性思考 (Study on the Problem of “Toilet” in Early Childhood Education)**」の中で以下のように指摘している。「20世紀末以前の中国においては、紙オムツなどの道具はまだ登場されず、保護者の労働負担を減少することと、乳幼児の風邪防止などのために、股割れズボンとやり手水が発明されたと推測できる」（黄小蓮 2012）。また、記事「**孩子1岁后应少穿开裆裤**」

（1歳以後の乳幼児は股割れズボンを控えるべきだ）の中で、やり手水をさせやすくする為、多くの保護者が乳幼児に股割れズボンを穿かせているが、乳幼児の衛生、特に生殖器の衛生面から見れば、様々な弊害があると述べられている（『家庭科技』2012.2）。先述のように、両区の早期教育センターに通う11名のインフォーマントの中、股割れズボンを使用するのがわずか3名である。そのうちの2名がやり手水を行っているが、残りのGケースの祖母が乳幼児の病気のため、股割れズボンの外に普通のズボンを穿かせ、紙オムツの中に排泄をさせているという。これらの事例は、やり手水と股割れズボンとの関連性があるものの、股割れズボンというモノ・道具に必ずやり手水という技法が伴うとは限らないことを示唆している。言い換えれば、股割れズボンの衰退は必ずしもやり手水の消失をもたらすとは言えない。むしろ、両区の調査においては、やり手水が伝統的な股割れズボンだけに結びついてあるわけではなく、現代的・欧米的な普通のズボンと紙オムツにも適応しつつあると言えよう。つまり、やり手水を実施する9ケースの中、

股割れズボンに合わせて技法を行うのがわずか2ケース、普通ズボン、紙オムツに合わせて技法を行うのが7ケースもある。やり手水が現代的・欧米的な普通のズボンと紙オムツにも適応している代表例がケースHの家政婦の技法である。ケースHの家政婦が子どもの4ヶ月の時からやり手水をし始め、やり方は普通のズボンを子どもの膝下まで深くおろし（股割れズボンの場合、ズボンを下ろす作業はない）、子どもの両足を高めて広げる方法である（股割れズボンの場合、乳幼児の身体は水平のままでよい）。彼女によれば、子どもの性別を問わず、彼らの姿勢を微調整すれば、普通のズボンでも汚すことがなく、やり手水ができるという。それ以外、乳幼児の片足のズボンを脱ぎ、やり手水をさせる場合もあれば、紙オムツもしくは普通ズボンをすべて脱ぎ、やり手水をさせる方法もある。以上が意味することは、伝統的な技法が伝統的なモノ・道具に適応しつつであるだけでなく、新しいモノ・道具に対しても適応していると言える。

一方、新しいモノ・道具の出現・普及により、伝統的な技法が行われなくなるケースも観察できた。例えば、ケースBの母方祖母がある育児書の言う通りに、紙オムツのみ孫に着用させている。しかし、彼女が孫のうんちの時間を大体把握しており、その時間帯に子どもの様子を頻繁にチェックしている。チェックの仕方はお尻の匂いを嗅いだり、孫に直接聞いたりすることである。孫がうんちをする際に、母方祖母がやり手水を行わず、孫が紙オムツの中で排泄することを静かに待ち、終わり次第、紙オムツを交換する。ケースBのような場合には、紙オムツという新しいモノ・道具に合わせて、伝統的な技法の代わりに、新しい技法、つまり、静かに見守ることを実施していると言えよう。

以上、子どもの普通のズボン、紙オムツに注目しながら、それらの道具とやり手水の関連について言及してきた。これまで、伝統文化や技法は近代化の影響を受け崩壊してきている、という報告は枚挙に暇がない。しかし、上記のように、ズボンやオムツなどの育児道具の変化に伴い、伝統的な技法の持続や変化が見られる。さらに、ケースBのように、紙オムツに合わせて新しい技法を創造することさえ起こりうる。

終わりに

本稿では、股割れズボン及びやり手水を中心に、現代中国都市部における子どもの排泄習俗が変容しながら、継続されていることについて考察を行った。

以下、そこで得られたくつかの点をまとめたい。まず、股割れズボンとやり手水が様々なメディアや人びとに批判されながらも、持続されており、その共通理由として、「湿疹・尻かぶれになりにくいこと」、「子どもの自律を促進すること」などがあげられる。

また、股割れズボンとやり手水の変容について、以下の二点を指摘したい。第1に、両方ともに都会社会において、子育て生活の表の舞台からその背後へと姿を隠し（消し）つつあることである。一昔、町中に股割れズボンを穿き、お尻を見せながら、歩きまわる子どもの姿を見るのが当たり前だった。花壇など土のあるところや、下水道の近く、道端で口笛を吹きながら、やり手水を行う風景も日常茶飯事であった。しかし、今の都会では、股割れズボンとやり手水が人の目に簡単に触れることはなく極僅かの限られた場所でしか見られなくなっている。

例えば、股割れズボンは家で、もしくは、下着としてしか穿かせないこと、やり手水も主に自宅で行われていることなどである。第2に、伝統的な股割れズボンとやり手水が、現代的・欧米的なモノとの併用・交渉が見られることである。股割れズボンと欧米的な紙オムツとの併用がその好例である。つまり、紙オムツとの併用は股割れズボンの欠点である「お尻の寒さ」「不清潔」などを克服できると考えられる。一方、やり手水という技法に関しては、批判的な意見があるものの、技法の広がりも見出される。つまり、技法が股割れズボンのみならず、普通のズボンや紙オムツに合わせて継承されている。一度身体化された技法は生活の様式が変化しても、簡単に忘れ去ることがないと言えよう。一方、伝統的な技法であるやり手水に対し、紙オムツスタイルに合わせた新しい排泄の技法、つまり子どもを静かに見守りながら紙オムツの中で排泄させる技法を用いる人びとも現れている。

最後に、本稿では触れきれなかった点をまとめ、今後の課題を示しておきたい。第1に、排泄習俗をよりトータルかつ深めるため、季節や場所の違いも配慮しなければならない。しかし、本稿で使われるデータが主に寒い時期、しかも自宅で行ったものであった。第2に、本稿は股割れズボンなどのもの、やり手水という技法に焦点を与えてきたが、物・技法を使う人びとを取り上げることができなかった。今後、中国の産育文化変容について注目されるのは、異なる文化・システムの境界に、新たな文化が創出され、さらにそこから中国内部文化・システムの構造の変容がもたらされてゆくという視点である。そのため、各々のエージェント、例えば、医者、早期教育センターの教師、子育てを担う家政婦などへの注目が必要となるだろう。

注

1、股割れズボンは中国語で開档裤 (kaidangku) と言い、「档 dang」は股間の意味をし、「裤 ku」はズボンの漢字である。開档裤を直訳すれば、股のあいたズボンである（本稿では股割れズボンと書く）。

2、中国では、出産後の1カ月間を「坐月子」と言い、日本以上に母体回復の大切な時期としている。出産後ほぼ一カ月の間、産婦は赤ちゃんに授乳すること、栄養のある物をたくさん食べることと寝ること以外に、何もしてはいけない。また「坐月子」の期間中、母親が必ず守らなければならない一連の禁忌やきまりが多くある。禁忌やきまりを守らなければならない理由はただ一つである。それは、この期間は病気になりやすい時期で、しかも病気にかかると、一生治らない、と言い伝えがあるからである。

3、親子活動とは、0-3歳までの子どもおよび3歳以上の未就園の子どもと親が、週末や週日の特定の日に幼児園あるいは地域のセンターに集まって、専門家からの健康指導、育児指導を受けたり、親子で自由に遊んだり、一緒に様々な活動を行うものである。

参考文献

日本語

天野正子/木村涼子/石谷二郎 2007『モノと子どもの戦後史』吉川弘文館

蒲生正男/村武精一 1979 『文化人類学を学ぶ』 有斐閣

翁文静 2012 「中国都市部における産育習俗の持続と変容—上海市の事例から—」『発達社会学研究』放送大学大学院文化科学研究科・人間発達科学プログラム・発達社会学研究室 第 4 号

太田 好信 1998 『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像』 世界思想社

川田順造 1992 『西の風・南の風』 河出書房新社

礪川 全次 2004 『土俗とイデオロギー』 批評社

礪川 全次 2004 『民俗とナショナリティ』 批評社

坂元一光 アナトラ・グリシャナティ 2008 「ビュシュック育児とその再編—中国新疆ウイグルの産育文化の一側面」『九州大学大学院研究紀要』 第 10 号

坂元一光 2008 「教育する衣食住—子ども生活文化論ノート」『国際教育文化研究』 vol.8

三砂ちづる 2009 『赤ちゃんにおむつはいらない』 勁草書房

矢田部秀正 2011 『ただずまいの美学—日本人の身体技法』 中公文庫

中国語

黄小莲 2012 「婴幼儿如厕训练的合理性思考」『学前教育研究』

徐安琪 2001 「家庭結構与代際関係研究—以上海為例的実証分析」『江蘇社会科学』 3 月

種漫天 2011 「伝統童装の形制及其民族事象」『芸術設計研究』 第 2 期 p41—45

馬梅英 2009 『準爸爸新爸爸』 江蘇科学技術出版社

万建中 2009 『民間誕生礼俗』 中国社会出版社

方曙 2012 「中西方伝統児童內衣文化差異研究」『理論研究設計』

李澤静 2010 「浅談中国封建礼教思想与開裆褲的發展」『文学界(理论版)』 07 期

李晓君 2012 「童趣无限_近代儿童开裆褲面面观」『东方收藏 , Oriental Collection,』 04 期

HP・その他

金旅网 <http://www.95160.com/tour/20120110/661.html>

中国华文教育网 <http://www.hwjyw.com/zhwh/content/2010/03/30/5052.shtml>

中华性文化博物馆 <http://www.chinasexmuseum.com/jsp/index/index.jsp>

「母嬰の家」 URL: <http://www.muyingzhijia.com/index.aspx>

『愛情婚姻家庭』記事 「把尿这件事儿」 2012/10

『監督和選択』記事 「传统棉尿布好还是纸尿裤好」 2005/7

『消費日報』記事 「“老尿布”成新宠」 2012/3

『中国婦女新聞』記事 「オムツの 60 年間の変遷—布オムツから紙オムツへの進化」 2009/10

『父母必读』記事 「纸尿裤 PK 布尿布」 2009/1

『家庭科技』記事 「孩子 1 岁后应少穿开裆褲」 2012/2

『母嬰世界』記事 「非要强制把尿么？」 2007/10

Child rearing folk tool, physical techniques and their Change in China

A case of “kaidangku” and “baniao”

WenJing WENG

The aim of this paper is to discuss the Child rearing folk tool, physical techniques and their Change in China's urban areas, focusing on “kaidangku” and “baniao”. “Kaidangku” means the pants with a big hole on the bottom, while “baniao” means helping a small child urinate or defecate by holding his legs apart.

Unlike the traditional studies, in this paper I intend to notice relevances between tools and physical techniques. And I examine the following points.

1. Some people in ShangHai are continue to use both Child rearing folk tool (“kaidangku”) and physical techniques (“baniao”). Many years ago, “kaidangku” and “baniao” had be seen everywhere in the city, but in recent years, they have been rapidly disappearing in public. To be specific, “kaidangku” is used as underwear and “baniao” is used at home.

2. Traditional tool and new tools are using at the same time. For example, People who wearing “kaidangku” but using disposable diaper concurrently. And this is true of Physical techniques, too. “Baniao” is not only used in the traditional “kaidangku”, but also be matched in the new tools, like pants without big hole on the bottom.

3. It is interesting to note that the new physical technique is observed. That means people who do not need holding the children's legs separately, they just watching at children calmly and waiting them to urinate or defecate in the disposable diaper.